

「日本における「子どもの性」に関する認識・情報の変遷

—近世後期から明治後期にかけて子どもの性的欲望・現象はいかに語られてきたのか— 要約

本研究は、子どもの性、とりわけ性的欲望・現象についていかなる認識・情報が歴史的に存在し、またそれらがどのようにして識者らによって主張され、時代の変遷のなかで変容していったのかを研究対象としている。研究の中心対象としている時代は近世後期（1772（安永元）年）～明治後期である。対象史料は医学・教育領域に属する史料を中心としている。

本研究で言及する「子ども」とは、研究対象とする各時代において、一般的に性的欲望・現象が発生しはじめるとされてきた年齢未満の、史料上で「幼い」と位置づけられている・あるいはそう目されていると見做せる存在を指す。近世後期から明治期にかけて、性的欲望・現象が発生しはじめる年齢というのは、「色欲」や「性欲」、あるいは「経水」や「精水」の発生などを指標にして「春機発動期」等の名称で歴史的に規定がされてきた。通例、それは早くとも13歳以降の年齢として規定され、その時期以降の性的欲望・現象の発生は、通常の現象であると歴史的に捉えられてきた。そのうえで、そのような若年者の性的欲望・現象が具体的にいかなるものであり、どのようにして性的欲望の過度な発動を制御していくのかなどの主張も歴史的になされてきている。そして、日本における春機発動期以降の若年者の性的欲望・現象がどのように歴史的に扱われてきたのかということは、これまで数多くの歴史研究が着目してきた。

しかし、本研究で調査対象としているのは、各時代において春機発動期以前の若年者の性的欲望・現象が、いかにして語られてきたのか、ということである。本研究では、近世後期と明治期において、一般的に性的欲望・現象が発生する時期であるとされている年齢以前の存在を「子ども」と表記し、その存在の性的欲望・現象について、いかなる認識や情報が存在し、それらが変容してきたのかを記述していく。このように書くと、本研究の課題設定はやや矛盾したものとしてうつるかもしれない。しかしながら、春機発動期以前の子どもについても、性的欲望・現象に関する主張は歴史的に様々なかたちで存在してきた。そうであるなら、当然そのような主張には、それが語られる理由や意義が存在してきたはずである。本稿ではそのような主張の歴史的展開を追うことで、それが提示されてきた歴史的意味や意義を明らかにしていく。

本研究で展開される論は、大要以下のものとなる。

第1章では、日本の近世後期の教育・医学領域において、子どもの性的欲望・現象に関する認識・情報がどのようにして語られていたのか、その様相と傾向が記述される。これらの領域の史料では、子どもと性的情報を接触させることについて極めて厳格な態度が表明されていく。しかしその一方で、子どもの性的欲望・現象それ自体がどのようなものであるのかについては、断片的な情報のみが示される状況があることが指摘される。

第1章で明らかにされることは、子どもの性的欲望・現象自体についての認識・情報を語

るといふその態度自体が、近世後期にはあまり形成されていないという点である。ただし、洋学における医学知識の流入によって、子どもの性的欲望・現象が「ある」ことについて、科学的見地からの言及も同時に出現してくることが明らかにされる。

第2章では、明治初中期において子どもの性的欲望・現象についての認識・情報がどのようなかたちで主張されていたのかについて記述される。明治期以降は特に、欧米的な性的欲望・現象に関する科学的知識が大量に流入していき、それが日本の医学・教育領域において様々なかたちで語られることになる。第2章においてはまず、人間全体の性的欲望・現象についての情報が医学や教育のいかなる領域・分野で扱われていたのかが明らかにされつつ、さらに人間の中でも、子どもの性的欲望・現象に着目した主張が、その中のどのような領域・分野で語られていたのかについての特定作業が行われる。

そして、子どもの性的欲望・現象に関する認識・情報が扱われていく主な領域・分野における、主張の傾向を紹介される。そのことにより、近世後期よりもはるかに、明治期には子どもに性的欲望・現象が「ある」と主張されているということが示される。そして、そのような主張の中にはさらに定型化された主張があることも観測されていく。それらはすなわち、

- ①子どもは手淫をすることがある
- ②子ども、その中でも特に女兒は、性的な早熟をあらわすことがある
- ③子どもの性的欲望・現象の発生には、教育的抑制策を必要とする

という3つの特徴的な主張であった。

第3章では、前章で見出された①子どもの手淫の問題についての主張が明治後期までにどのようにして語られていったのかが示される。そこでは、子どもの手淫がいかなる意味で問題とされたのか、また、その問題化のされ方の変遷が記述される。その過程で、子どもの手淫という問題が、当時の医学界において調査研究を実施するに足るトピックにまでなることが示される。そしてその研究動向は、日本の性科学研究の進展すらもたらしたのであった。

第4章では、子どもに性的欲望が「ある」という状態が、近代国家として問題だとされていたことが明らかにされる。そして、子どもに性的欲望・現象が「ある」ことについて、とりわけて国家と関連付けて問題視されていくのが②の女兒の性的早熟をめぐる主張であった。第4章では、医学やその境界領域である優生学・人類学的媒体において、女兒に性的な早熟が生じることが「野蛮」や「未開」な社会状態をあらわれであると主張されていくさまを記述することになる。第4章においては、子どもの性的欲望・現象の認識・情報をあらわす主張の中にも、子どものジェンダーの差異で論じられていく内容が異なるものがあることが示される。

第5章以降では、③子どもの性的欲望・現象の発生には、教育的な抑制策を必要とする主張の変遷が記述されていく。この問題は、明治期には特に「色情教育」「性欲教育」というトピックのなかにおいて語られていく問題としてあった。

第5章ではまず、「色情教育」・「性欲教育」などの一連の教育論がどのようにして明治後期までに展開・発展していったのかについての歴史記述が行われていく。③の議論が展開されていくことになる「性欲教育」等は、基本的には春機発動期が到来した後の、中等教育段階の若年者を対象とした教育論としてあった。そのため、その中の子どもを対象とした教育論に着目するためにも、まずこの「性欲教育」などが日本社会に登場していった経緯が明らかにされる。日本の性教育の歴史研究においては、これの成り立ちについて触れられることはあるものの、いささか正確な記述を欠いていたままであった。

第6章では、③についての具体的な歴史記述が行われる。明治中期以降、③に位置付く主張として、子どもの「自分はどこから生まれたのか」という人間の誕生に関する質問に、大人は適切に答えなければならない、ということが「性欲教育」論などで語られていくようになる。

当初、子どもの誕生に関する質問は、教育研究領域で論及の対象になる際、特に性的な事柄との関連性の上で語られているトピックではなかった。それが、時代の流れの中で、子どもの誕生に関する質問が「性欲」や「色情」に関連するとして教育研究領域において問題化されていく。そして、「性欲」に関する質問に対し、適切に返答することを通じて、教育研究領域は、子どもの質問を御し、将来の不幸を防ぐべきであるとを主張していくのであった。

終章では、以上のような歴史的検証から、近代以降、子どもにも性的欲望・現象は「ある」とする学的主張が展開され始めた歴史的意味について考察が加えられていく。